

京都女大家政 西田 幸子

1. 前報に引続き魚類に含まれるビタミン $B_1$ の結合型および遊離型 $B_1$ の生体内分布について検索した。

2. チオクローム反応によって総 $B_1$ 量を求め、次いでブタノールによって遊離型 $B_1$ をおとし残りの結合型 $B_1$ についてその量をも検索した。試料は淡水魚ではこい、ふな、あゆ、どじょう、うなぎ、もろこなど、海水魚ではさば、あじ、たい、さけ、かれい、きすなどを用いた。

3. 魚類では一般に $B_1$ は筋束、眼球に最も多く肝、胃、腸、腎、鰓、などがこれにつき、脾、脳、脊髄および皮膚などには少なく、殆んどが結合型 $B_1$ として分布しており、遊離型 $B_1$ の分布は少ない。筋肉では筋束に少量の遊離型 $B_1$ を認める。眼球では殆んどが遊離型 $B_1$ として分布している。胃、腸では粘膜層および粘膜下組織に少量の遊離型 $B_1$ が認められ、また腸では腸内容の充虚によって粘膜上皮の $B_1$ の吸収状態に著しい差違が認められる。肝では血管壁にわずかに遊離型 $B_1$ の分布が認められる。腎では細尿管、腎小体および血管壁などに少量の遊離型 $B_1$ の分布が認められる。脾、精巣、脳脊髄、鰓、皮膚などでは遊離型 $B_1$ は痕跡程度に認められるにすぎないことが観察された。